

千歳台小学校
めばえの会会員各位

船橋希望学舎
世田谷区立千歳台小学校
めばえの会会長 阿部 洋
文化厚生委員長 池ヶ谷 愛子

令和元年度 第6回 船橋希望学舎 合同家庭教育学級

(第3回めばえセミナー) 報告書

テーマ：『子どもたちの今を知る』

講師：マセソン 美季（マセソン みき）氏

◆長野 1998パラリンピック冬季競技大会の金メダリスト

◆カナダ在住、二児の母

日時：令和元年12月14日（土）14：00～16：00

場所：船橋希望中学校 2階 多目的ルーム

参加人数：133名

（来賓15名、船橋希望中43名、希望丘小22名、船橋小27名、千歳台小26名）

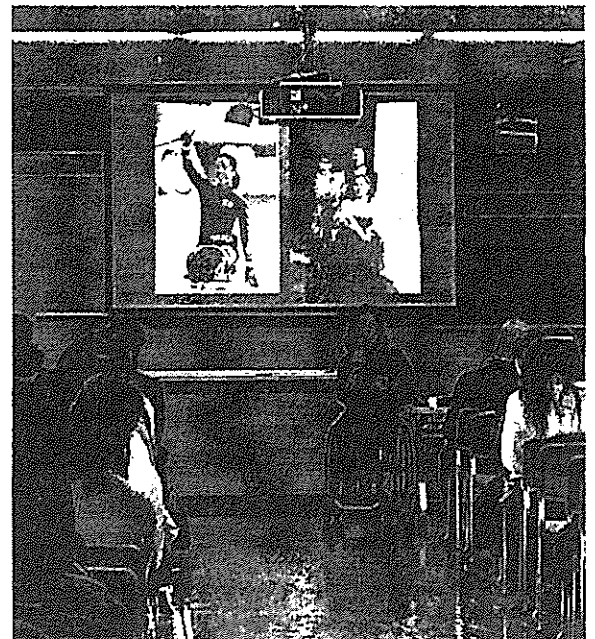


今年度、船橋希望学舎では、国際オリンピック委員会（IOC）の教育委員であるマセソン美季（みき）氏をお招きし、「子どもたちに伝えたい インクルーシブな考え方 ～パラリンピックに学ぶ～」についてご講演をいただきました。

“インクルーシブ”ということばは、まだまだ日本では馴染みがないのかも知れません。反対のことばに“エクスクルーシブ”ということばがあります。これは「一部の人を外へ追い出す」「のけ者にする」などの意味があります。この反対のことばが“インクルーシブ”だと捉えると分かりやすいのかもしれない。

実際の経験やエピソードを交えた楽しく具体的な内容で、インクルーシブな考え方における、障害がある人への接し方などについて改めて考えることができるよい機会になったことと思います。

本研修にご参加、ご協力いただきましたみなさまには、担当者一同、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



■■失ったものを数えるな。残されたものを最大限にいかせ！

大学生の時、不慮の交通事故により下半身まひとなり、以降、移動には車いすを使っているマセソン先生。体育の教員を目指す中で、スポーツ医学も少し勉強していたため、医師から歩行不能を宣告される前から何となく理解しており、落ち込んだ覚えもないそうです。全く知らない人が宣告を受けた場合と比べると、ショックの度合いが低かったと振り返っておられました。それよりも、一番ショックだったのは「スポーツができなくなること」。

初めて観戦した“車いすバスケット”で、今まで障害がある人に対して「早い！凄い！カッコいい！」の形容詞を使ったことがなく、「かわいそう..大変そう..」というイメージが自分の中にもあったことに気付かされます。

選手たちは、自分にできないことや無いものに対してクヨクヨしたりメソメソしたりしているわけではなく、「自分に残されたものを活かして一体どんなことができるだろう？」という気持ちから前向きになっており、それは、パラリンピックを象徴することばでもあります。そのことばで、マセソン先生自身も、かなり前向きになれたそうです。

パラリンピックは、「足りなかったら用具でカバーすればいい」「ルールを変えればいい」「サポートの仕方を変えればいい」といった、工夫の仕方を問うのがたくさん詰まっています。人間の可能性を発揮する・発見するという意味で、パラリンピックは、障害がある人たちがただスポーツをする大会ではなく、発想の転換をさせてくれる大会でもあるため、そんなところにも注目して欲しいです。

■■日本と世界の違い

日本…

- ・車いすが最大の障害
- ・インフラが整備されている＝生活しやすいではない
- ・帰国すると、障害者であることを思い知らされる感覚
- ・歩けなくなったから車いすを使って移動しているというただそれだけなのに、車いすに乗ったとたんに、周りがなぜかぎこちなくなる。
- ・日本は、障害がある人やマイノリティの人を守ってあげよう精神。社会の輪の中にはいるが、その中に居場所はなく、分けて考えられている感じがある。

海外…

- ・英語を流暢に喋れないこと（コミュニケーション）が最大の障害。
- ・車いすに乗っていることはちっとも気にならない。
- ・障害の度合いは、環境によって変わると実感。
- ・海外は、一緒にやろうよ！みんなと一緒に手を繋いでやろうよ！精神。

同じ場所を共有していればインクルーシブなのかということそうではなく、自分の居場所を見つけ意味のある参画の仕方ができる・充実した感覚で活動に参加できるかどうか、それをきちんと整えているかどうかで、インクルーシブな社会にできているかどうかが決まります。日本は、同じ場所にただ一緒にいればいい..それだけで終わってしまっているのが現状のようです。

■差別や偏見は「教育」がもたらす

4つのバリア

- ・物理的なバリア
- ・制度のバリア
- ・情報面のバリア
- ・意識のバリア

マセソン先生は上の4つのバリアを挙げ、中でも「意識のバリア」が一番大きいとのこと。もちろん答えはひとつではありませんが、差別や偏見は「教育」だと考えています。

人権教育啓発センター横田先生のことばのようですが、教員を目指していたマセソン先生の胸に突き刺さりました。

日本では障害がある人に出会った時、指をささない・ジロジロと見ない・そのまま通り過ぎるなど、私たち大人が子どもたちに見せている態度そのものが、子どもに対して無言で教育してしまっています。学校の授業の教育だけではなく、差別や偏見をもたらししている私たち大人の役割がとても重要であることに気がされました。

マセソン先生は、このような現状から、逆に教育をうまく変えさえすれば、差別や偏見はなくなるのではないかと思い、パラリンピックの教育を通して子どもたちの考え方や意識を変えていこうとされています。

■Impossible (不可能) → I' m possible (私には、できる！)

I' m possible とは、Impossible に ' (アポストロフィ) を加えた造語です。不可能ということばにほんのひとつ点を入れるだけで、まったく逆の意味になります。

不可能と思えたことも、見方や考え方を変えたり工夫したりすれば、できるようになる。

パラリンピックの選手たちは色んな方法で伝えてくれる。

そんな思いから、国際パラリンピック委員会 (IPC) 公認教材のタイトルを「I' m POSSIBLE (アイムポッシブル)」にされたそうです。「違っていい！違う意見をもつことってすごく大事だよ！」を、この教材で伝えています。また、社会の中において公平さを保つためにはどうしたらよいかを、パラリンピックを題材にしながら伝えていこうともされています。

インクルーシブを考えるに時には、当事者の意見を聞いてみるということがとても大事な視点として考えて欲しい。ご家庭でも、何でもお父さんは知っている・お母さんは知っているではなく、「こんな考えはどう？」「その考えもあるね！」など、頭を柔らかくして子どもと対話しながら一緒に考えてみるアプローチが必要ではないかと教えていただきました。

■■私たちに期待すること

- ・可能性に目を向ける
- ・違いを受け入れ、互いを認め合う
- ・当たり前を疑う
- ・インクルーシブな考え方を身に付ける



インクルーシブな種まきをしていると思って欲しい。

- ・一流は「すぐに行動する」
- ・二流は「気がついてやらない」
- ・三流は「気がつかない」



何か気づきがあれば、ぜひ今日から行動して欲しい。

■■講演後アンケート（抜粋）

- こういった講演会は初めてでしたが、とても話が楽しく、そして自身の生活にとってもポジティブになれる機会でした。子育ての教訓も多数あり、貴重な時間になりました。
- 意識のバリアが少しでもなくなるような子育て、自分自身も含めて社会からバリアをなくしていけるようにしていきたいと思いました。
- 聞いたことがないインクルーシブな考え方に触れることができ面白かった。一緒にいるだけでなく一緒に参加するということを、どの様にしたらよいか考えていきたいと思った。
- 私にも足の不自由な息子がいるので、共感する部分が多くありました。まだまだ障害がある人への理解に対して日本は進んでいないと思う。障害がある・ないにかかわらず、困っている人に優しい日本であってほしいと願うばかりです。
- 自分が変わらなければ人は変わらない！を胸に、行動していきます。
- 心が強いですね。娘は障害があるので、大きくなった時に強くあって欲しいと思います。
- ポジティブで明るくて、本当に素敵な女性だなと思いました。朝日小学生新聞で連載されているのを存じていたので、お話を聞きたくて参加しました。子どもに自己肯定感をしっかりもってもらえるよう試行錯誤しながらの日々ですが、多様性を学びながら一緒に成長していけたらと思います。
- 差別や偏見は教育から。知らず知らずに無言の教育をしてしまっているというお話にハッとさせられました。
- Impossible → I'm possible 不可能だと思えることも見方や考え方を変えたり工夫したりすればできるようになる！
- 予想以上に私たちの子育てや生活に密着したお話を聞くことができ、とても楽しかったです。

たくさんのご意見ご感想ありがとうございました。

—船橋希望学舎—

世田谷区立船橋希望中学校 PTA・希望丘小学校 PTA・船橋小学校 PTA・千歳台小学校めばえの会

